

## 【フォーラム】

## カドリ語における語中の閉鎖音と破擦音

稲垣和也

日本学術振興会特別研究員

**【要旨】** 本稿の目的はカドリ語の語中子音の弁別について記述し、その分布を基に語中子音の音韻変化に関して提案をおこなうことである。他のオーストロネシア諸語と同様、カドリ語の標準的語形はCを随意的要素とするCVCCVCであり、この語形に含まれる子音連続-CC-には、h + 無声閉鎖音・破擦音のもの（以下-hT-）と、鼻音 + 有声閉鎖音・破擦音のもの（以下-ND-）がある。まず、-hT-と-T-の、(i) 単一形態素における生起、(ii) 単一形態素における反復生起、(iii) 人称代名詞や数詞などの頻用語彙における生起が、-ND-と-D-よりも高頻度であることをしめし、このような頻度差は各々の機能負担量の差に起因していることを指摘する。さらに、-T-、-D-が直前にそれぞれh、Nを伴うか否かという点のみで弁別される語彙のペアを挙げ、それらの量的な差に基づいて各々の機能負担量の差を明らかにする。これら語中の子音と子音連続の弁別についての記述は、Hudson (1967) が不完全に仮定していた\*T>hT/V\_\_Vおよび\*NT>Tの音韻変化を補完するものである\*。

**キーワード：**オーストロネシア諸語、閉鎖音・破擦音、使用頻度、機能負担量、再建形

## 1. はじめに

オーストロネシア諸語 (AN) の標準的な語形はCVCCVC（各構成子音Cを随意的要素とする二音節）であり、このような語形における語中の子音連続-CC-は、ANの、とりわけ通時的研究を基盤とした論究の対象の一つとされてきた (Brandstetter 1916: 298–300, Dempwolff 1934: 96–109, Dyen 1971: 44–46, Dahl 1976: 10, 103–104, 等)。本稿では、筆者が現地調査によって収集した一次資料をもちいて、

\* 本稿は日本言語学会第133回大会で発表した内容に加筆・修正したものである。学会発表予稿集原稿および本稿の執筆にあたり、庄垣内正弘先生、田窪行則先生、吉田和彦先生、吉田豊先生ならびに京都大学大学院文学研究科言語学研究室の諸先輩方、大学院生より、多数の御助言と励ましのお言葉をいただいた。この場を借りて深く御礼を申し上げたい。また、本稿を改訂する上で貴重なご指摘を下された二名の査読ご担当の先生方に感謝したい。本稿で用いる資料の一部は、2006年度学術振興会特別研究員奨励費および科学研究費補助金（課題番号：182587）により、インドネシア共和国、中カリマンタン州においておこなった現地調査で得たものである。現地調査は、2005年1、8月、2006年2、8、10月に中カリマンタン州、カハヤン川源流、トゥンバン・マリコイ (Tumbang Marikoi) にておこなった。この場を借りて、調査に協力いただいた母語話者の方々、Herdinata (20代男性)、Kusmawan (30代男性)、Lie (60代女性)、Line (60代女性)、Simah (30代女性)、Tarisman (30代男性)、Tiyong Batu (60代男性)、Ucan Singa Tukan (80代男性)、Uper Lambih (80代男性)、Yahudi (50代男性) に謝意を表したい。

ANの一つであるカドリ語 (Kadorih) の語中閉鎖音・破擦音 (-C-), およびこれを含む子音連続 (-CC-) の弁別に関して記述をおこなう。カドリ語の語中閉鎖音・破擦音に対して Hudson (1967) が通時的な考察をおこなってはいるが、本稿が提示するようなデータや記述がこれまで明らかにされることはなく、特にその共時的な音韻の側面については不透明であった。

本稿の構成は以下のとおり。2節で、カドリ語の音声と音韻の概要を述べる。3節において、語中の閉鎖音・破擦音 (無声の /-T-/ と有声の /-D-/) と語中の子音連続 (/-hT-/ と鼻音を伴う /-ND-/) を共時的観点から記述する。3.1節で、/-T-/, /-D-/, /-hT-/, /-ND-/ それぞれの使用頻度とふるまいを見る。3.2節で、/-T-/, /-hT-/ の方が /-D-/, /-ND-/ に比べて高い機能負担量を担っていることをしめし、それぞれの語中閉鎖音・破擦音の機能負担量とその使用頻度・ふるまいの間の相関を指摘する。4節では、通時的観点から、バリト諸語の形式、マラヨ・ポリネシア祖語およびオーストロネシア祖語の再建形を参考に、Hudson (1967) の説を検討する。

## 2. カドリ語：音声・音韻の概略

カドリ語はボルネオ島南部 (インドネシア) の河川の源流域で話される (図1参照)。系統的にはオーストロネシア語族、(西) マラヨ・ポリネシア語派、(北西) バリト語群に属するとされる (Gordon 2005, Hudson 1967。先行研究では “Dohoi” や “Ot Danum” の言語名が知られている)<sup>1</sup>。

カドリ語の音素目録は、閉鎖音 /p, b, t, d, k, g/, 破擦音 /c, j/ [tʰ, dʒ] (歯茎硬口蓋), 摩擦音 /β, s (歯茎硬口蓋), h/, 鼻音 /m, n, ŋ/ (歯茎硬口蓋), η/, 流音 /r, l/, 接近音 /y/ を含む。これらの主な異音について、(i) 語頭の有声閉鎖音・破擦音は同器官的な前鼻音を伴う [ᵐb, ᵐd, ᵐdʒ, ᵐg], (ii) 前舌狭母音 /i/ の前後にある歯茎音ないし歯茎硬口蓋音は口蓋化せず、舌尖から舌端を可動調音器官、歯から歯茎を目標部位として狭め (stricture) をつくる [t̚, d̚, ŋ̚, ʃ̚, ʒ̚, t̚c̚, d̚c̚, ŋ̚], (iii) 語末の無声閉鎖音は開放せず、無破裂音となる [p̚, t̚, k̚]<sup>2</sup>。

<sup>1</sup> Gordon (2005) において、“Dohoi” の話者数が25,000人と報告されており、“Kadorih” は (根拠はしめされていないが) その一方言とみなされている。このことから、カドリ語の話者数はおそらく25,000人を下回ると思われる。

<sup>2</sup> 例えば以下のような例がある (ローマ数字による番号付けは本文のものに合わせた)。

(i) /baco/ [ᵐbətco] ‘crocodile’, /daha/ [ᵐdʰəh] ‘blood’, /jaa/ [ᵐdʒe] ‘chin’

(ii) /tikos/ [t̚ikoʃ] ‘riddle’, /rimo/ [r̚imo] ‘five’, /sioi/ [ʃ̚ioi] ‘nine (archaic)’

(iii) /atop/ [ᵐt̚op] ‘door’, /opit/ [op̚it̚] ‘rice bird’, /pudak/ [p̚udək̚] ‘pandanus’

音声記号について、下点つきの [t̚, d̚, ŋ̚] は, Ladefoged & Maddieson (1996: 25–27) による “two degrees of retroflexion” の議論に従い、舌尖・歯茎の軽微そり舌子音をあらわす。また、下付きのプラスを付した硬口蓋鼻音 [ᵐ] は、歯茎硬口蓋の子音をあらわす。歯茎硬口蓋子音に下付きのブリッジを付した子音には、元々の歯茎硬口蓋における狭めに加え、歯・歯茎を目標部位とした舌尖・舌端による狭めが生じる。このような下付きのブリッジは、歯茎音の調音における目標部位の変更、ないし歯茎硬口蓋音の調音における目標部位の追加をあらわすために用いている。

図1 ボルネオ島：筆者の調査地であるマリコイ村



カドリ語の音韻語で頻度の高い構造タイプは  $(C_1)V(C_2)(C_3)V(X)$  とあらわすことができる ( $C$  = 子音,  $V$  = 母音,  $X$  = 狭母音あるいは特定の子音。丸括弧でくくったものは随意的な要素であることをあらわす)。先頭の  $C_1$  が /g, β, y/ であるような音韻語や,  $V$  が前舌半狭母音 /e/ であるような音韻語は稀である。また,  $C_2C_3$  に該当する子音連続には, 二つのタイプ, 即ち  $h$  + 閉鎖音・破擦音 (無声タイプ: /-hp-, -ht-, -hk-, -hc-/) と, 鼻音 + 閉鎖音・破擦音 (有声タイプ: /-mb-, -nd-, -ng-, -nj-/) がある。いずれのタイプでも第二要素の  $C_3$  は必ず閉鎖音・破擦音である。加えて, 第一要素  $C_2$  と第二要素  $C_3$  は, 無声タイプにおいて [声帯振動の有無] の指定が必ず同一であり ( $h$  [無声]  $T$  [無声]), 有声タイプにおいて [調音位置] の指定 (両唇, 歯茎, 軟口蓋, 歯茎硬口蓋のいずれか) が必ず同一である<sup>3</sup>。カドリ語の語中の子音連続を構成する二子音は, これらの指定値を分節音の下位情報として共有していると見ておきたい<sup>4</sup>。

### 3. 語中閉鎖音・破擦音の共時的記述

カドリ語には八つの閉鎖音・破擦音が認められる (/p, t, k, c; b, d, g, j/)。本稿では, 記述の便宜のため, “-T-” という記号を用いて, 語中の閉鎖音・破擦音で無声のもの全てをあらわすことにする。他の語中子音および子音連続も同様に, “-D-” によ

<sup>3</sup> カドリ語の音韻体系における「共鳴音(鼻音・流音・接近音)ならば有声音である」という余剰規則を無視すれば, 有声タイプの子音連続は [調音位置] の指定に加え, [声帯振動の有無] の指定も同一となる (例えば, /-mb-/ は  $m$  [両唇, 有声]  $b$  [両唇, 有声])。

<sup>4</sup> この分析は,  $-C_2C_3-$  の音素配列に関する条件を述べている。その一つを簡略化して述べると, 「 $C_2$  が無声音であるときかつそのときに限り  $C_3$  が無声音である」ようになる (この条件から, 例えば,  $-C_2C_3-$  には  $h$  + 有声閉鎖音・破擦音のような配列が予測されない)。

て「有声閉鎖音・破擦音」, “-hT-” によって「h + 無声閉鎖音・破擦音」, “-ND-” によって「鼻音 + 有声閉鎖音・破擦音」をあらわすことにする。

Hudson (1967: 53-54) によると, カドリ語 (“Dohoi”) は, 他のバリト諸語に見られない “medial preaspirated voiceless stops and affricate”<sup>5</sup> を持つ点で特異であるという。以下の (1) から (4) に, Hudson (1967) の認める -T-, -hT-, -D-, -ND- それぞれを含む語彙を挙げる<sup>6</sup>。

	両唇	歯茎	軟口蓋	歯茎硬口蓋 (破擦音)
(1)	rapaŋ ‘to float’,	puti ‘banana’,	rikou ‘forehead’,	bocah ‘rice’
(2)	ohpat ‘four’,	mahta ‘eye’,	ihkuh ‘tail’,	uhcaŋ ‘deer’
(3)		radiŋ ‘knife’,		hajo ‘big’
(4)		ondou ‘day’,		ruñju ‘spear’

Hudson (1967) は, (最小限の) 音対応に基づいてバリト諸語の分類を試みる先駆的研究であるが, 個別言語の音韻体系を十分に検討してはいない。このことは記述言語学的観点から見て大きな問題点の一つである。とりわけ, “-hT-” がカドリ語内の他の語中閉鎖音・破擦音と体系的に対照されていない。-T-, -hT-, -D-, -ND- の弁別に関する共時的・体系的記述がなければ, “-hT-” が単なる音声的な実現なのか, 音韻的なステータスをもつものなのか定かではない。

以下の 3.1 節と 3.2 節では, 上記のような問題を改善するため, 筆者の現地調査から得られたデータを用いて, カドリ語における語中の閉鎖音・破擦音の記述と分析をおこなう。

### 3.1 使用頻度とふるまい

語中の閉鎖音・破擦音および子音連続について, 筆者のもつ資料には, /-T-/ , /-hT-/ , /-D-/ , /-ND-/ を含む, (5), (6), (7), (8) のような語彙が見られる (以下, カドリ語の語彙項目の例示には音素列を用いる)。

- (5) /-T-/: opit ‘rice bird’, upu ‘parent-in-law’, butui ‘belly’, mutah ‘to answer’, ikin ‘finger’, nokuh ‘(to go) to’, bocah ‘husked rice’, kacu ‘wood’
- (6) /-hT-/: ahpu ‘fire’, mihpīh ‘thin (of objects)’, bihtik ‘ant’, ŋuhta ‘to vomit’, rihtkut ‘back (of the body)’, nuhtkat ‘to climb’, ihco ‘one’, mahcu ‘far’
- (7) /-D-/: bibit ‘seed’, karabambaj ‘butterfly’, kadorih ‘like that’, radiŋ ‘knife’, hajo ‘big’, kujum ‘cheek (inside)’, ogo ‘grandfather’, ragu ‘song’

<sup>5</sup> ここでいう “preaspirated” は, 音素目録内の系列を特徴付けるものとみなされているわけではない。本稿も同様に, 無声閉鎖音・破擦音 (/p, t, k, c/) , 鼻音 (/m, n, ŋ, ñ/) の系列は認めるが, 前帯気閉鎖音・破擦音 (/<sup>h</sup>p, <sup>h</sup>t, <sup>h</sup>k, <sup>h</sup>c/) の系列は認めないという立場をとっている。

<sup>6</sup> Hudson (1967) の表記に次の変更を加えて提示する: tj → c, dj → j, l → r, ŋg → ŋ。

- (8) /-ND-/: **ombu** ‘long (of objects)’, **rimbit** ‘to take care of’, **ɲindoi** ‘to wait’, **tonduk** ‘horn’, **piñjan** ‘dish’, **tañjuj** ‘journey, course’, **paŋgar** ‘thwarts’, **reŋge** ‘fishing net’,

ここで、/T-/、/hT-/の使用頻度 (frequency) と /D-/、/ND-/の使用頻度が異なることに注目したい。筆者のもつ語彙リストには、語中閉鎖音・破擦音を含む単一形態素が584個ある<sup>7</sup>。このうち、閉鎖音・破擦音を語中に二つ含む単一形態素が12個あるので、語中閉鎖音・破擦音のサンプル総数は596個となる。その中で、無声のもの、/(h)T-/は453個 (76%)、有声のもの、/(N)D-/は143個 (24%)である (詳細については表1を参照されたい)。このことから、単一形態素の語中閉鎖音・破擦音について、/T-/と/hT-/の使用頻度は/D-/と/ND-/に比べて3倍以上であることがわかる。

表1 単一形態素における語中閉鎖音・破擦音の使用頻度

		/T-/	/hT-/	/D-/	/ND-/
(p, b)	両唇	53	44	7	43
(t, d)	歯茎	109	53	16	41
(k, g)	軟口蓋	97	49	9	7
(c, j)	歯茎硬口蓋	31	17	13	7
	合計	290	163	45	98

次に、語中の閉鎖音・破擦音を二つ含む語彙を (9) に挙げる<sup>8</sup>。

- (9) a. /-(h)T-/: **bakatak** ‘(the name of a frog)’, **kapahtuŋ** ‘small statue’, **katohpat** ‘a kind of rice-cake snack’, **pakacan** ‘clothes’, **prakokoj** ‘(the name of a frog)’, **tapahkan** ‘end, tip’, **tokucou** ‘rice porridge’, **totahpi** ‘but’  
 b. /-(N)D-/: **karabambaj** ‘butterfly’, **kedondoj** ‘a species of *Spondias*’, **ragaji** ‘saw’, **tembaga** ‘copper’

語内で閉鎖音・破擦音の生起が繰り返される (9a) と (9b) の語彙数を比べると、/(N)D-/を用いるタイプの繰り返しよりも、/-(h)T-/を用いるものの方が頻繁に見られると考えられる。

また、人称代名詞や数詞は頻用語彙とみなすことができる。/-(h)T-/ないし/(N)D-/をもつ人称代名詞を (10) に、数詞を (11) に挙げる。

<sup>7</sup> 単一形態素を選び出す際、一つの語基を別々のサンプルとして抽出しないよう注意を払う必要がある。例えば、/ND-/をもつ **henda** ‘turmeric, a species of *Curcuma*’ と **ba-henda** ‘yellow’ は別々のサンプルとみなさない。

<sup>8</sup> 語中に二つ以上の子音を含む単一形態素は90例ある。このうち、語中子音の組み合わせとして最も多いのは、流音と閉鎖音・破擦音の組である (52例, 58%)。例: **kotoruh** ‘egg’, **parecoj** ‘bitter melon, *Momordica charantia*’, **paranduk** ‘chevrotain’。また、/hT-/は語末音節核音の直前の位置のみに現れる。この点は、4.2節で再び言及する。

## (10) 頻用語彙：人称代名詞（所有形を含む）

- a. **ahku** 'I', **ekai** 'ours (exclusive)', **eku** 'mine', **eto** 'ours (inclusive)', **ihkai** 'we (exclusive)', **ihkam** 'you (plural)', **ihko** 'you (singular)', **ihcto** 'we (inclusive)'  
 b. **endo** 'theirs'

## (11) 頻用語彙：数詞

- a. **ihco** 'one', **ohpat** 'four', **jaratien** 'nine', **rahtus** 'hundred', **kucan** 'thousand'  
 b. **uju** 'seven'

/-(h)T-/ を含む (10a), (11a) と, /-(N)D-/ を含む (10b), (11b) の語彙の量的な差から, 語中閉鎖音・破擦音をもつ頻用語彙は, /-(N)D-/ よりも /-(h)T-/ を含むものの方が多いと考えられる。

以上, /-D-/、/-ND-/ よりも /-T-/、/-hT-/ の方に, 単一形態素内での生起, 反復生起, 頻用語彙の数が多いことを見た。このように, /-T-/、/-hT-/ の方が用いられやすいという実状は, それらの, より高い機能負担量に起因していると考えられる。次節では, 筆者のもつ限られた資料の中から, 語中閉鎖音・破擦音の差異のみで意味が異なる語彙のペアを例示し, その量的な差をしめすことによって, /-T-/ と /-hT-/ の弁別が高い機能負担量をもつことを確認する。

## 3.2 機能負担量

筆者のもつ語中閉鎖音・破擦音を含むデータにおいて, 直前に /h/ を伴うか否かという点のみで意味が異なる語彙のペアは (12) に挙げる 18 組が見つかっている。

- (12) /-p-, -hp-/: **apaŋ** 'seed, pip', **ahpaŋ** 'sacred decapitating knife of Kalimantan'; **napa** 'to make', **nahpa** '(the name of a fish)'; **tonapa** 'to be made', **tonahpa** 'sole of the foot'  
 /-t-, -ht-/: **itik** 'carving, carved work', **ihitik** 'duck'; **katop** 'obstacle', **kahtop** 'bamboo clothespin'; **matoi** 'to cook by putting pot over fire', **mahtoi** 'to die'; **motonŋ** 'brave, courageous', **mohtonŋ** 'to make a knot, to wrap'; **pitu** 'door sill', **pihtu** 'seven (archaic)'; **potik** 'various species of wasps and gnats', **pohitik** 'a species of rattan'; **puti** 'banana', **puhti** 'white'; **totanŋ** 'light', **tohtanŋ** 'tattoo'  
 /-k-, -hk-/: **akai** 'ouch!', **ahkai** 'for him/her/it/them'; **bakai** 'not yet finished', **bahkai** 'monkey'; **ruku** 'door sill', **ruhku** 'cigarette'; **naka** 'jackfruit', **nahka** 'dragon'; **pakat** 'title, degree', **pahkat** 'friends'; **tukanŋ** 'door', **tuhkanŋ** 'craftsman'  
 /-c-, -hc-/: **kacaŋ** 'straight', **kahcaŋ** '1 plaited mat, 2 peanut'

/-T-/、/-hT-/ が語の弁別に寄与していることは, (12) に挙げた例から明らかである。

また, 語中閉鎖音・破擦音が有声であるか無声であるか (声帯振動の有無) とい

う点のみで意味が異なる語彙のペアには (13a) に挙げるものがある。(13b) のペアでは「声帯振動の有無」に加え、子音連続であるか否かという点も意味の弁別に寄与する。

- (13) a. /-T-, -D-/: *raŋiŋ* ‘raft’, *raŋiŋ* ‘knife’; *oko* ‘old’, *ogo* ‘grandfather’  
 b. /-hT-, -D-/: *paŋtiŋ* ‘twig’, *paŋtiŋ* ‘metal waist band’;  
*ihco* ‘one’, *ijo* ‘(nominalizing particle)’

次に、直前に鼻音を伴うか否かという点のみで意味が異なるペアを見る。このような語彙のペアは、(14) に挙げる 2 組しか見つかっていない。

- (14) /-b-, -mb-/: *tabit* ‘spiritual counselor’, *tambit* ‘grip, hold’  
 /-g-, -ŋg-/: *pagar* ‘fence, hedge’, *paŋgar* ‘thwarts’

(14) の /-(N)D-/ の語彙のペアと比べると、(12) の /-(h)T-/ のペアの量は圧倒的に多い(また、(13) からもうかがえるが、/-(N)D-/ が関わる場合、弁別的なペアの量は少ない)。このような量的な差に基づいて、一般には、/T-/、/hT-/ の弁別の方が /-(N)D-/ よりも高い機能負担量を担うと考えられる。3.1 節では、筆者のもつ限られた資料から、単一形態素内での生起、繰り返し、頻用語彙が、/-(N)D-/ よりも /-(h)T-/ の方に多いことを観察した。このことは両者の機能負担量と関連するものと考えてよいだろう。

#### 4. 語中の無声閉鎖音・破擦音に関する通時的考察

本節では、カドリ語における語中の無声閉鎖音・破擦音に関して、バリト諸語の形式、オーストロネシア祖語 (PAN) およびマラヨ・ポリネシア祖語 (PMP) の再建形を参考に、通時的考察をおこなう。4.1 節で Hudson (1967) のデータと分析を確認し、4.2 節では /-hT-/ が生起する語内の位置について論じる。

##### 4.1 バリト諸語から見た語中の無声閉鎖音・破擦音

Hudson (1967) によると、バリト諸語には Ba’amang をはじめ、16 の言語が認められる。このうち、カドリ語は語中の無声閉鎖音 T の直前に h を持っている点で、他のバリト諸語と比べて特異であるとされる。-hT- を含む (2) の語彙を (15) に再掲し、これに対応する語彙として挙げられているバリト諸語の例の中から代表的なものを (16) に挙げる。

- ‘four’ ‘eye’ ‘tail’ ‘deer’  
 (15) カドリ語: *ohpat mahta ihkuh uhcaŋ*  
 (16) バリト諸語: *epat mate’ ikuh bacaŋ*

カドリ語の -hT- と他のバリト諸語の -T- が対応している語彙は、(15)、(16) のものを含めて 12 組が認められている (ibid.: 40–52)。

一方、カドリ語の -T- は、他のバリト諸語の -NT- ないし -T- と対応している。

	カドリ語	バリト諸語	
(17) a.	rapaŋ	lampaj	‘to float’
b.	puti’	punti’, puti’	‘banana’
	kotou’	kontou’, katou’	‘right’
	otu’	ontu’, hatu’	‘corpse’
c.	rikou	liŋkou, likau	‘forehead’
	rukuŋ	luŋkuŋ, lukeŋ	‘worm’

(ibid.: 46, 51–53)

Hudson (1967) は、(15) と (16) のような対応を見せる -hT- について、「[カドリ語の] 刷新 “innovation” によるものなのか、他の全バリト諸語において失われる祖音素 “proto-phonemes” なのか不確定である」としているが、“\*T>hT/V\_\_V” という音変化を設けて、バリト祖語に “\*T” を再建している。一方、(17) の音対応に関しては、“\*N>Ø, N/\_T” の音変化を設けて、祖語に “\*NT” を再建している (ibid.: 52–54)<sup>9</sup>。つまり、カドリ語の -hT-, -T- はそれぞれバリト祖語の \*T-, \*NT- に溯ると措定されている。

## 4.2 PAN および PMP の再建形とカドリ語の刷新

以下、Blust (1988, 1999), Verheijen (1984) によって設けられた PAN, PMP の再建形を参照する。(18) にカドリ語の /-hT-/ を含む語彙とそれに対応する再建形を挙げ、(19) に /-T-/ を含む語彙とそれに対応する再建形を挙げる。

- (18) /-hp-/: **ahpui** ‘fire’ (PAN. \*Sapuy), **mihpih** ‘thin (of objects)’ (PMP. \*ma-nipis), (\*-p-) **nuhpi** ‘dream’ (PAN. \*Sepi), **nihpō** ‘tooth’ (PAN. \*nipen), **ohpat** ‘four’ (PAN. \*Sepat)
- /-ht-/: **ahtoi** ‘liver’ (PMP. \*qatay), **bahtu** ‘stone’ (PAN/PMP. \*batu), **kuhtu** ‘head (\*-t-) **louse**’ (PMP. \*kutu), **mahta** ‘eye’ (PMP. \*mata), **mahtoi** ‘to die’ (PMP. \*m-atay), **ŋuhta** ‘to vomit’ (PAN/PMP. \*utaq), **puhti** ‘white’ (PMP. \*ma-putiq)

<sup>9</sup> これらの音変化に関して、Hudson (1967) のデータ内には例外と考えられるものもある。“\*T>hT/V\_\_V” の例外として、ucan ‘rain’, -ruca ‘to spit’, atoi ‘liver’, -katuih ‘hundred’ などがあ (ibid.: 38, 39, 50, 51)。ただし、本稿筆者の調査データにある uhean, ruheca, ahtoi, rahtus をもとに考えると例外的ではない。一方、“\*N>Ø, N/\_T” の例外として、jantuŋ ‘heart’ (ibid.: 40) があるが、付録に見られる jatunŋ (ibid.: 84) から考えて、単なるタイプミスだと思われる。また、“\*N>Ø, N/\_T” の変化が “\*T>hT/V\_\_V” よりも先に生じたと仮定するべきではない。仮にその順序ならば、例えば、両方の変化をこうむることになる ‘banana’ の祖形 \*punti (>puti>puhti) は、カドリ語において puhti ‘white’ と同音異義になるはずだが、実際はそうならない (puti ‘banana’)。

- /-hk-/: **ahku** 'I' (PAN/PMP. \*i-aku), **bahkuŋ** '*Crinum asiaticum*' (PMP. \*bakuŋ),  
 (\*-k-) **ihko** 'you (singular)' (PMP. \*i-kahu), **ihkuh** 'tail' (PAN/PMP. \*ikuR), **rihku**  
 'back' (PAN/PMP. \*likud), **muhka** 'to open' (PMP. \*buka), **nahkou** 'to steal'  
 (PMP. \*takaw), **pahku** 'fern, *Athyrium esculentum*' (PMP. paku/pah(e)ku)
- (19) /-t-/( \*-nt-): **puti** 'banana' (PAN/PMP. \*punti)  
 /-k-/( \*-ŋk-): **naka** 'jackfruit' (PMP. \*naŋka)

(18) の PAN ないし PMP の再建形には語中閉鎖音・破擦音の直前に \*h がなく、カドリ語の /-hT-/ と再建形の \*-T- が対応している。一方、(19) の再建形は語中閉鎖音・破擦音の直前に鼻音を含んでおり、カドリ語の /-T-/ と再建形の \*-NT- が対応している<sup>10</sup>。

ここで、**kotoruh** 'egg' と再建形 (PMP. \*qateluR, \*qiteluR) の対応に注目したい。この語彙では、カドリ語の /-T-/ が PMP の \*-T- に対応しており、(18), (19) で見た対応とは明らかに異なる。しかし、この語彙のもつ -T- が語末から数えて二音節目の母音の直前にある ( $\_V_2CV_1C$ )<sup>11</sup> のに対し、(18), (19) の -T- が語末音節の母音の直前にある ( $\_V_1$ ) 点には注意しなければならない。

三音節語には、語中閉鎖音・破擦音の生起可能な位置が二つある ( $CV_3\_V_2\_V_1X$ )。筆者のもつデータで、/-hT-/ は語末から二音節目の母音の直前に現れることはなく ((9a) を参照されたい)、その生起は " $V_2\_V_1$ " の環境に限られている。このような制限は、Hudson (1967) の定式化  $^{**}T > hT / V\_V$  "において見落とされている (p. 54) が、それは彼の定性的研究における議論が、二音節語のデータに依拠していたためであると思われる<sup>12</sup>。

しかしながら、/-hT-/ の出現環境が限られているというカドリ語内部の共時的な事情に基づいて、Hudson (1967) の設けた音変化を  $^{**}T > hT / V_2\_V_1$  "のように改めるべきではない。なぜなら、語末から三音節目と二音節目の母音に挟まれた閉鎖音・破擦音 ( $T / V_3\_V_2$ ) の再建が未だ充分ではないからである<sup>13</sup>。現時点では、バリト

<sup>10</sup> 次に挙げる語彙は /-hT-/(PAN, PMP. \*-T-), /-T-/(PAN, PMP. \*-NT-) の対応の例外に見える: **ruhca** 'spit' (PMP. \*luzaq), **mitom** 'black' (PMP. \*ma-qitem), **uhcan** 'rain' (PMP. \*quzan)。ただし、バリト諸語の形式、-luca 'spit', -intem/mintom 'black', ucan 'rain' (Hudson 1967: 39, 74/88, 38) をもとに考えるならば例外的とはいえない。

また、ほとんどの場合、\*-hT- は PAN や PMP に再建されない。これは、ほとんどの分派諸言語が反映形 (reflex) に /-hT-/ を持たない、あるいは仮に持っていたとしても、語中母音の消失等の音変化から反映形を導き得る (\*hVT > hT) ことなどから、\*-hT- を再建する必要がないことを意味している。

<sup>11</sup> 以下、語末から見て、一音節目の (final) 母音を  $V_1$ 、二音節目の (penultimate) 母音を  $V_2$ 、三音節目の (antepenultimate) 母音を  $V_3$  と表示する。

<sup>12</sup> Dempwolff の再建した 2000 を越す項目の九割以上が二音節である (Chrétien 1965) ことからもうかがえるが、二音節語を優先する見方はオーストロネシア諸語研究、特に通時的研究において標準的なものである。Hudson (1967) の議論が二音節語のデータに依拠していたのは、このような見方がバリト諸語のデータにもあてはまる点と、バリト諸語の語形の分析、特に接頭辞の分析が不完全であった点が理由であると考えられる。

<sup>13</sup> Hudson (1967) は、-T- と -NT- の音対応の議論の中で、**kotoruh** 'egg' に対する Kapuas. tanteluh,

諸語の記述が充実しておらず、その三音節語を再建するのは困難であるが、カドリ語の /-hT-/ がなぜ特定の環境に限られて生じたのか、その原因を探ることは興味深い。おそらく、このことを歴史的に説明するための手がかりの多くは、バリト諸語の三音節語に関する研究を通じて得られるだろう。

## 5. おわりに

本稿をもって主に報告したのは、カドリ語における語中の閉鎖音・破擦音および子音連続、 /-T-/、 /-hT-/、 /-D-/、 /-ND-/ に関する共時的事実である。語彙を弁別する機能を例示によってしめし、同時に、おのおのの機能負担量が各使用頻度・ふるまいと相関していることを指摘した。これによって、今まで不透明なままであったカドリ語における語中閉鎖音・破擦音の音韻論的側面が明らかになったといえる。また、語中の無声閉鎖音・破擦音に関する通時的考察を通して、Hudson (1967) による先駆的研究を検討し、十分な証拠のないまま仮定されていた \*T>hT/V\_\_V と \*NT>T の変化を語中子音の共時的記述に基づいて補完した。さらに、カドリ語の /-hT-/ がなぜ末尾音節核音の直前だけに生起するのかという問題提起をおこない、バリト諸語の三音節語に関する研究が解決の糸口の一つとなる可能性を示唆した。この他、本稿では扱わなかったが、通言語的にもあまり類を見ない “\*T>hT” の音変化の動機について、さらなる探究の余地が残っている。

## 参 照 文 献

- Blust, Robert (1988) The Austronesian homeland: A linguistic perspective. *Asian perspectives* XXVI (1): 45–67.
- Blust, Robert (1999) Subgrouping, circularity and extinction: Some issues in Austronesian comparative linguistics. In: Elizabeth Zeitoun and Paul Jen-kuei Li (eds.) *Selected Papers from the Eighth International Conference on Austronesian Linguistics*, 31–94. Taipei: Academia Sinica.
- Brandstetter, Renward (1916) *An introduction to Indonesian linguistics* [translated by C. O. Blagden]. Volume XV of Asiatic Society Monographs. London: The Royal Asiatic Society.
- Chrétien, C. Douglas (1965) The statistical structure of the Proto-Austronesian morph. *Lingua* 14: 243–270.
- Dahl, Otto Christian (1976) *Proto-Austronesian*. Second revised edition. Scandinavian Institute of Asian Studies Monograph series, no. 15. Lund: Studentlitteratur.
- Dempwolff, Otto (1934) *Vergleichende Lautlehre des austronesischen Wortschatzes, 1, Induktiver Aufbau einer indonesischen Ursprache*. Zeitschrift für Eingeborenen- Sprachen (Beiheft 15). Berlin: Dietrich Reimer.
- Dyen, Isidore (1971) The Austronesian languages and Proto-Austronesian. In: Thomas A. Sebeok (ed.) *Linguistics in Oceania*. Volume 8 of Current Trends in Linguistics. The Hague: Mouton.
- Gordon, Raymond G. Jr., ed. (2005) *Ethnologue: Languages of the world*. SIL International. Online version [Accessed 8 September 2006]: <http://www.ethnologue.com/web.asp>, 15th edition.
- Hudson, Alfred B. (1967) *The Barito isolects of Borneo: A classification based on comparative reconstruction and lexicostatistics*. Ithaca, New York: Department of Asian Studies, Cornell University.

---

Ba'amang. hantelui (p. 87) のデータを明示的に分析してはいない。“V<sub>3</sub>\_\_V<sub>2</sub>” に現れる (N)T が “\*N>Ø, N/\_\_T” の音変化によって生じた結論づけるには、該当例が少なすぎるからであろう。

- Ladefoged, Peter and Ian Maddieson (1996) *The sounds of the world's languages*. Oxford: Blackwell.
- Verheijen, Jilis A. J. (1984) *Plant names in Austronesian linguistics*, volume 20 of NUSA, Linguistic Studies of Indonesian and Other Languages in Indonesia. Jakarta: Universitas Katolik Indonesia Atma Jaya.

[受領日 2007年1月7日 最終原稿受理日 2007年4月25日]

## Abstract

### Word Medial Stops and Affricates in Kadorih

KAZUYA INAGAKI

*JSPS Research Fellow*

In this paper, I describe the phonological distinctions between word medial consonants in Kadorih. On the basis of distributional facts, I give a strong support to the theory of the phonological changes of these consonants, proposed in Hudson (1967).

As in other Austronesian languages, Kadorih's canonical word shape is disyllabic CVCCVC where all of the consonants are optional. There are only two types of word medial consonant sequences (-CC-), viz. /h/ followed by a voiceless stop or an affricate (-hT-), and a nasal consonant followed by a voiced stop or an affricate (-ND-). I demonstrate that -hT- and -T- occur more frequently than -ND- and -D- in (i) monomorphemic words, (ii) both of the word medial positions in trisyllabic monomorphemic words, and (iii) frequently used words such as personal pronouns and numerals. Based on these observations, I show that the difference in frequency between -(h)T- and -(N)D- is due to the difference in their functional loads. This claim is corroborated by comparing the quantities of their respective distinctive pairs: CVhTVC – CVTVVC on the one hand, and CVNDVC – CVDVC on the other. The comparison presented in this paper provides evidence that -hT- and -T- have a higher functional load than -ND- and -D-. The phonological distinctions attested between these word medial consonants support Hudson's theory of the phonological changes, \*T>hT/V\_V and \*NT>T, which he assumed in spite of insufficient evidence.